



むすんで、うみだす。

京都産業大学



河合塾

京都産業大学

一般選抜入試対策講座 古文

河合塾 古文科講師 菅井 聖子

京都産業大学の出題傾向

長文はやや短め（七〇〇字程度）

設問数は六問から七問

短めの語句の現代語訳が3題

傍線部の解釈問題と説明問題

文学史が毎年出題されている

問一

傍線部X、Y、Zの現代語訳として最も適切なもの。

X「おこなひ人」

1 修行者

2 悪人

3 旅行者

4 仙人

Y「露も知らねば」

1 夜露もわからないので

2 まったく知らないので

3 涙などとは無縁なので

4 少しも記憶にないので

Z「せんかたなき」

1 それほどでもない

2 わけがわからない

3 どうしようもない

4 やりばのない

問七 『宇治拾遺物語』と異なる
ジャンルのものとして最も適切な
ものを一つ選び、マークせよ。

1 『今昔物語集』

2 『十訓抄』

3 『日本霊異記』

4 『閑吟集』

昔、吉野山の日蔵のきみ、吉野の
奥におこなひありき給ひけるに、

たけ七尺ばかりの鬼、身の色は紺

青の色にて、髪は火のごとくに赤

く、首細く、胸骨はことにさし出

でて、いらめき、腹ふくれて、は

ぎは細くありけるが、

Xこのおこなひ人にあひて、手を

つかねて泣くこと限りなし。

問一

X 1 修行者

2 悪人

3 旅行者

4 仙人

「Aこれは何ごとする鬼ぞ」と

問へば、

問二 傍線部Aこの時の日蔵の
気持ちの説明したもの

1 何事かをされるのではと不
安を抱いている。

2 何かわけがあるのかと不思議に
思っている。

3 さめざめと泣く鬼にあわれ
みを感じている。

4 屈強な鬼の姿を目にして警
戒を覚えている。

この鬼、涙にむせびながら申す

やう、「我は、この四五百年を

過ぎてのむかし人にて候ひしが、

人のために恨みを残して、今は

かかる鬼の身となりて候ふ。さ

てその敵をば思ひのごとくにと

り殺してき。

それが子、孫、曾孫、玄孫にいた
るまで残りなくとり殺しはてて、

今は殺すべきものなくなりぬ。さ

れば、なほ彼らが生まれかはりま

かる後までも知りて、とり殺さん

と思ひ候ふに、

次々の生まれ所、 Y 露も知らねば、
とり殺すべきやうなし。

問一

- Y 1 夜露もわからないので
- 2 まったく知らないの
- 3 涙などとは無縁なので
- 4 少しも記憶にないので

瞋恚しんいの炎は同じやうに燃ゆれども、

敵の子孫は絶えはてたり。ただ我

ひとり、尽きせぬ瞋恚の炎に燃え

こがれて、Zせんかたなき苦をの

み受け侍り。

問一

Z 1 それほどでもない

2 わけがわからない

3 どうしようもない

4 やりばのない

B かかる心を起こさざらましかば、

極楽天上にも生まれなまし。

☆反実仮想

事実に反することを仮に想像する

問三 傍線部Bの現代語訳

1 このような復讐の心を起こさなかったならば、極楽や天上界にも生まれ変わることはできなかっただろうに。

2 敵にかかわろうとする心を起こさなかったので、極楽や天上界に生まれ変わったのかもしれない。

3 このような復讐の心を起こさないとすれば、極楽や天上界にも生まれ変わることはできないだろう。

4 敵にかかわろうとする心を起こさなかったことにして、極楽や天上界に生まれ変わらせてほしい。

ことに恨みをとどめて、かかる身

となりて、無量億劫ごうふの苦を受けん

とする事の、せんかたなく悲しく

候ふ。人のために恨みを残すは、

しかしながら、我が身のためにて

こそあり（甲）。

問四 空欄に入る語

1 けむ 2 けり 3 ける

4 けれ

敵の子孫は尽きはてぬ。我が命

はきはまりもなし。かねてこの

やうを知らましかば、かかる恨

みをば残さざらまし」と言ひ続

けて、涙を流して泣くこと限り

なし。

そのあひだに、かうべより炎や
うやう燃え出でけり。さて山の
奥ざまへ歩み入りけり。

さて、日蔵のきみ、あはれと思
ひて、それがためにさまざまの
罪滅ぶべき事どもをし給ひける

とぞ。

『宇治拾遺物語』

問五 鬼は日蔵に何をしてほしかつたのか。

1 とり殺さなければならぬ敵の子孫らが、いまどこにいるのか、それを突き止める手立てを教えてほしい。

2 同じように山中をさまよう者どうし、鬼となつたこの苦しみを理解して、心から寄り添い涙を流してほしい。

3 昔の自分は、恨みが報いとしてわが身に返ってくるとは知らなかった。何とか苦しみから解放してほしい。

4 敵の子孫がかわいそうに思えてきた今、人の心を取り戻した自分を、どうかして人間の姿に戻してほしい。

問六 本文の内容に合致するものを二つ選べ。

1 生きること、に悩み吉野山の奥へと入った日蔵は、人間の罪深さを思い知るために鬼と出会う運命だったのだと得心した。

2 鬼はある人への恨みが原因でこのような姿となり、その敵を思いどおりに子孫にいたるまで殺すことができたと言った。

3 とり殺した敵の子孫らが次々と生まれ変わっていると耳にした鬼は、その居場所を教え、てほしいと日蔵に泣いて頼んだ。

4 手あたりしだいに人を殺害した鬼は、幼い子を殺すことを思いとどまったことで極楽天上に生まれ変わることができた。

5 鬼は恐ろしい姿をしていたが、実は罪業を自覚し仏の道にも通じており日蔵を悟りに向かわせる導者の役割をはたした。

6 不滅の命をもつ鬼は悔恨の涙を流しているときであつても、怒りや恨みによる炎が頭の上から徐々にたちのぼっていた。